母身まかりける時も、奴婢をたのまず、みづから醫師の方へ行、あつらへてはしり歸りては、煎じあたへなど、志をつくし、なき跡のかなしみは、他人のなみだをさへおとさせけり、其後に妻をむかへて、農業をつとめければ、ほど〳〵に富さかへけるにつけても、あはれ母の世に有し時、かくあらましかば、よろこびたまはましものをとて、くやみなきけり、元祿七年甲戌に六十歳、なほ世におこなひ侍るとぞ、

〔長崎夜話草 四〕長崎孝子六人

高雲禪寺の宗融長老は、本肥前國の產なり、當寺住職の中、一人の老母あり、つかへ養ふ事、極めて孝なり、母常に魚味を好めり、素寺中の制禁なれど、母のわかき頃より好めるたぐひを、今さら堅く止め侍らば、老のちから、いよ〳〵おとろへ、壽き持ちがたからんにやと、時々魚類を買求め、門脇なるおのこを賴み、其家にて調味して、母にすゝめ侍りぬ、寺貧しければ、はか〴〵しき下僕もあらず、常に出るに、大かたは供人もなし、ある時、一人市町を往るに、母の好める鮮き魚を賣にあへり、悅びて、そこらの知人に錢を借りて、魚を買、葛わらやうのものにつらぬき、みづから手に提もて歸りて、例の門わきなる屋にて調味して、母にすゝめ侍りぬ、ひとへに母を愛するの誠深くて、人の褒貶をおもはず、身の名聞を忘れたる也、是をもてよろづおしはかりて、いとたふとき法師なる事を云りぬ、年經て、母も寺にて終り、後に其身は他方にて、遷化有けるとぞ、學才も大かたならぬ人なりしとかや、

〔窗の須佐美 一〕或人小石川白山邊に住けるが、子二人持て一人は男子なり、〇中略二十に及まで、猶あらくたけ〳〵しければ、自不孝の名を得て、世にもにくみあひけり、其うしろの家に老儒すめり、常に此子の親に不順なるをにくみ、折節は云出ても詈りけり、或夕暮彼子來て見へんと云に、〇中略老儒手を打て、其方は不善人にてはなかりけるぞや、學問は其改めんとおもふ心卽ち基な